

## モンゴルの遊牧と市場経済

私たちは、自分達が暮らし慣れた社会のシステムが最も優れていて、このシステムをどの社会に適用しても、必ず良い効果のみをもたらす、と考えてしまいがちです。しかし、この考え方は果たして現実的なものでしょうか。社会の持続可能性を考えるためには、世界各地の社会の多様性を理解することが必要とされます。この問題について、この30年間にモンゴル国の遊牧に起こった大きな変化は、多くのことを示唆しています。

### 1. モンゴルの伝統遊牧

モンゴル人は、遊牧に基づく社会を歴史的に形成してきました。モンゴル高原が含まれる中央ユーラシア北部草原地帯は、降水量が少なく、降雨は夏に集中し、また水源地も限られます。多くの人や家畜が一か所に集住する生活形態(=定住農耕)では、土地は荒廃し、生活が破綻します。そこで、水、草の資源を有効活用し、厳しい自然を乗り越えて生活するために、春夏秋冬それぞれの牧地を巡って家畜を飼養する生活形態=遊牧が成立したのです。モンゴルの遊牧では、羊、山羊、馬、牛、ラクダの5種類の家畜(五畜)の中から、各地の自然条件に応じて、数種類を飼養します。それぞれの家畜は、種類毎に食べる植物が異なります。また、モンゴル高原の植生は、地域によって様々です。モンゴルの遊牧は、遊牧が行われる地域の自然条件、家畜の数、種類のバランスの間で成立しています。

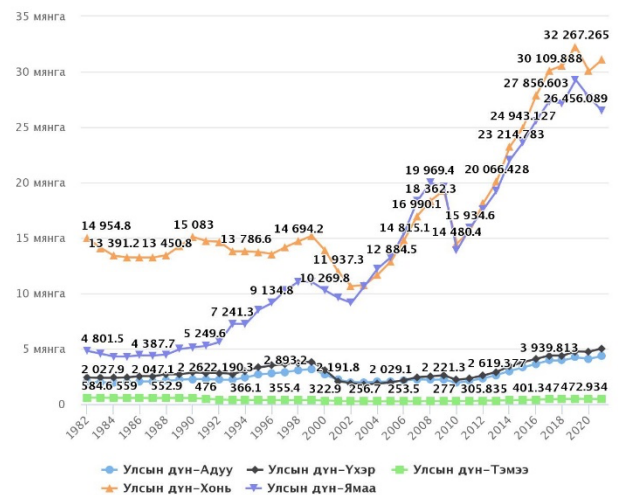
### 2. 社会主義から資本主義へ

モンゴル国では、20世紀~21世紀にかけて社会主義から資本主義へと国の体制が移行し、社会に大きな変化が生じました。ソ連の影響下で社会主義建設を目指したモンゴル人民共和国では、遊牧を国の基幹産業と考え、遊牧に対するサポートが手厚くなされました。一方で、私有財産が制限され、自分の資本を自由に増やせる経済システムではないため、遊牧作業に対する遊牧民の意欲が低下し、遊牧は停滞しました。

1980年代末以降、ソ連圏社会主義諸国で民主化が進むと、1992年、モンゴルでも社会主義を捨て、国名を「モンゴル国」と変え、資本主義国家としての歩みを始めました。この時以降、私たちの社会ではごく当たり前のものである市場経済が、モンゴル国の遊牧社会に導入されていったのです。

### 3. 市場経済の導入と遊牧の変化

モンゴル国に市場経済の波が押し寄せると、遊牧も市場経済化していくことになります。資本主義社会では、資本を増やすことが求められ、現金収入が重視されます。モンゴル国の遊牧がこれに適応しようとした結果、家畜数に大きな変化が現れました。図1は社会主義時代の1980年代から現在までのモンゴル国の家畜頭数の種類別の変化です。



(図1：モンゴル国の家畜数の変化—オレンジ=羊、紫=山羊、黒=牛、水色=馬、緑=ラクダ)

市場経済の導入以降、羊、山羊、馬、牛の頭数が急激に増え、2021年の時点で、約6730万頭の家畜が人口約340万人のモンゴル国で飼養されています。特に顕著なのは山羊の頭数の増加です。山羊が突出して増加したため、家畜の種類のバランスにも変化が起きました。市場経済に適応した遊牧が模索された結果、史上空前の家畜数の増加が発生したのです。

#### 考えるヒント：

- ✓ 家畜数の急激な増加は、モンゴル高原の自然や社会にどのような影響を与えていると思いますか。
- ✓ 元来、少なかったはずの山羊は、なぜ増加したのでしょうか。「山羊から得られる畜産物」をヒントに考えてみましょう。また、1つの種類の家畜のみが特に増加した際に、どんな影響が想定できますか。
- ✓ 「持続可能な発展」という視点から、伝統的産業の維持・発展と市場経済の関係はどうあるべきか、考えてみましょう。